

1995年7月15日(土)～8月30日(水)



▲海軍火薬廠動力場から総務部・水交社・高麗山方向を望む

《夏期特別展開催》

## 『44万7,716本の軌跡-平塚の空襲と戦災-』

開催期間：7月15日(土)～8月30日(水)

平塚市は、昭和20年7月16日から17日の未明にかけ、B29爆撃機132機により大規模な攻撃を受けます。

これが「平塚大空襲」です。

この時、B29から投下された焼夷弾は、全部で44万7,716本を数えます。これは、一夜の投弾数としては、全国で1・2を争う数になります。その結果、死者237人、重軽傷者268人、罹災戸数7,678戸の被害を蒙ります(神奈川県警察調べ)。

こうした事実から、戦後50年にあたり、「平塚大空襲」の実態を、市域に残る戦中・戦後の資料を通して紹介し、平和の尊さを訴え、郷土平塚の近・現代史を明らかにしていきたいと思えます。また、本展示は、平塚大空襲50年、戦後50年にあたり実施している平塚市の平和事業の一環として開催しております。

<1・2ページ使用の写真は米国国立公文書館蔵>  
会場：平塚市博物館特別展示室・1階寄贈品コーナー

### 関連行事

#### ●講演会

「戦争末期の湘南と平塚大空襲」8月13日(日) 午後1時から3時まで  
講師 栗田尚弥氏(お茶の水女子大学講師) 場所 博物館講堂

#### ●戦跡見学会

「市内戦跡めぐり」7月16日(日)・8月20日(日) 午前10時から12時まで  
博物館前集合

\*両行事とも参加自由(無料)です。

# なぜ、平塚が!?

■平塚大空襲の際、B29爆撃機から投下された焼夷弾の数は、全部で44万7,716本を数えます。この数は一夜の投弾数としては全国で八王子に次いで多い数でした。

■何故、平塚が徹底的に破壊される空襲を受け、全国で1・2を争う投弾数になったのでしょうか。その理由は、3つほど上げることが出来ます。

■その第一の理由は、平塚が県下有数の軍需都市であったことです。

当時、平塚の軍需工場は、海軍火薬廠をはじめ、横須賀海軍工廠平塚分工場、海軍航空廠などの官営工場のほか、民間軍需工場には日本国際航空工業、近江航空工業などがありました。当時、平塚の人口は54,050人であることが知られています。この5万余の人口の相当数は、当時、軍需工場に動員され他市町村から移入した住民と考えられ、1万人を越えると予想されます。そして残りの住民の多くが、先の軍需工場の従業員若しくはその家族、あるいは先の工場の関連下請け工場の従業員及びその家族でした。一体となった軍需工場と住民、それが「軍都平塚」と言われ、空襲の対象になった第一の理由です。

■その第二の理由は、軍都平塚にある工場が航空関連工業および航空技術開発の研究機関が集中する軍需工場であったことです。

アメリカ軍は、対日本との戦いの中で最も脅威に感じていたものに、日本の航空機及び航空技術そして航空機を使った特別攻撃にありました。日本国際航空工業の可変プロペラの生産は、その技術を含め日本で3番目に重要なプロペラ製作所で

あるとアメリカは考えていました。また、究極の特攻兵器「BAKA」（日本名「桜花」）が平塚で作製され、それも火薬廠で推進火薬を製造し、日本国際航空工業で機体を製作・組み立てていたことが、空襲の対象になった第二の理由です。

■その第三の理由は、アメリカが日本本土上陸作戦を実施するうえで平塚が戦略的に重要な都市であったことです。

アメリカ軍は、昭和19年7月マリアナ諸島を占領し、日本本土侵攻への重要な足掛かりを掴み、「本土上陸作戦」の本格的な研究を開始します。そして、昭和20年5月に九州と関東両地区の上陸作戦が決定承認されます。他方、平塚大空襲の計画も5月3日現在、ほぼその全容が計画・決定されていたのです。

関東上陸作戦は「コロネット」と呼ばれ、上陸地点を茅ヶ崎海岸として、西側の防備に相模川を利用し北上侵攻、八王子から東に転じ東京に侵攻するものでした。この時、戦略的に重要な都市に平塚・八王子があったと考えられます。上陸作戦を成功に導くため、戦略的に重要な二都市（航空産業を基軸にした軍都）を徹底的に破壊し、無防備の状態にして置く必要があったのです。このことが平塚を空襲の対象にする第三の理由です。

■平塚は7月16日、八王子は8月1日に、それぞれ132機、169機のB29の攻撃を受けます。そして、それぞれ1162.5トン、1593.3トンの焼夷弾が投下され、対人口比で平塚は8.3本、八王子は8.6本という猛烈な攻撃に晒されたのでした。戦後進駐したアメリカ軍は、この二都市の破壊状況を見て「やりすぎた」と表現しています。アメリカ軍の上陸作戦との関係で平塚空襲を捉えた場合、徹底的破壊は当然なことであったのかも知れません。



▲ターゲット・ナンバーの付された偵察写真



▲八幡大門通り付近（現野村証券付近）



▲東海道本通り（本宿）



「海軍火薬廠跡」の碑の前で

《夏期特別展関連行事開催》

## 『市内に残る平塚大空襲の爪痕を訪ねる』

現在、博物館1階特別展示室では、夏期特別展「44万7、716本の軌跡—平塚の空襲と戦災—」展が開催されています（8月30日まで）。この特別展の関連事業として、7月16日、「市内に残る平塚大空襲の爪痕を見よう」をテーマに戦跡見学会が開催されました。当日は、40名を越す市民の方が集まり、高砂香料・富士チタン・横浜ゴム・共済病院のほか、記念碑や焼け焦げの残る電柱などを見て廻りました。

同様の企画は、8月20日（日）にも実施いたします。午前10時に博物館前に集合してください。

また、8月13日（日）には、栗田尚弥氏を講師に迎え、記念講演会「戦争末期の湘南と平塚大空襲」を予定しております（午後1時から3時、博物館講堂）。

どちらも参加自由（無料）です。是非、大勢の方々の参加を希望しています。

# 周到に準備されていた平塚大空襲

平塚大空襲の際に投下された焼夷弾の数は44万7,716本にも上ります。

この投下数は、3月10日の東京大空襲の36万本余、5月29日の横浜大空襲の34万本余をはるかに越える数でした。

こうした攻撃を平塚に実施するため、米軍は19年末頃から平塚攻撃のための具体的な計画立案に入っていました。計画は、市域上空のB29による度重なる偵察飛行により実施されます。現在、その偵察飛行の第1回目は、昭和19年12月13日であることが判明しています。その後、度々B29は平塚上空に飛来し、偵察を行っています。そして、偵察により入手した写真を以後の平塚空襲の具体的な計画に利用していたのです。例えば、火薬廠をはじめとして、海軍航空廠、横須賀海軍工廠、日本国際航空工業、近江航空工業などの軍需工場が市内のどの地域に存在しているか、その広さはどれくらいかなどを偵察写真を元に確定線引きし、それぞれの工場にターゲット・ナンバー（米軍は、対日本との戦いにあたり全国の主要な軍需工場を攻撃するため番号を付けています。）を付しています【写真上】。さらに火薬廠や日本国際航空工業については、その偵察写真を大きく引き伸ばし、一つ一つの建物に番号を付け、その建物がどのような建物であり、建物内部では何が作られて、それぞれの建物がどのような関係にあるか克明に記録しているのです【写真中】。その結果、攻撃すべき対象建物を限定し、その建物を破壊するために使用する爆弾とその攻撃方法について綿密な計画が練られているのです。

攻撃は中・高高度（B29の攻撃）と低高度（艦載機による攻撃）の攻撃に分けられ、実際の攻撃では、火薬廠が中・高高度の攻撃、日本国際航空工業が低高度の攻撃を受けています。B29による中・高高度の攻撃は、市街地を含む攻撃でした。そのためには市街地のほぼ中央にあたる旧太陽神戸銀行付近が爆撃中心点になりました。この爆撃中心点をMP1といいます。このMP1の地点も偵察飛行で得られた写真の中に記入されていました【写真下】。

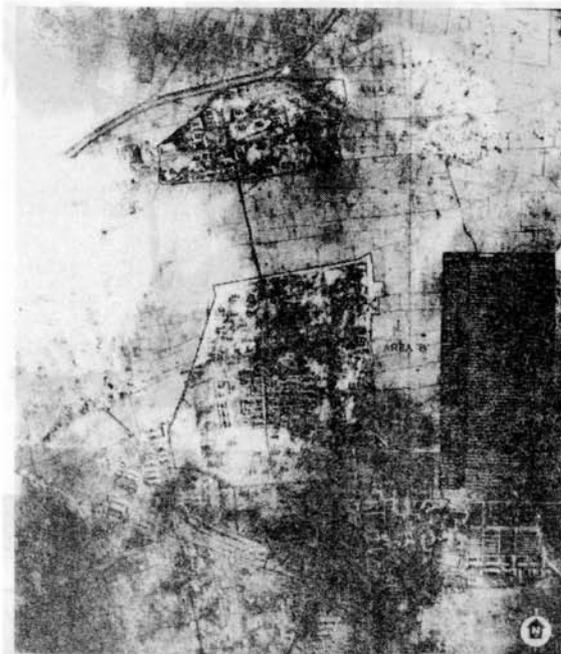
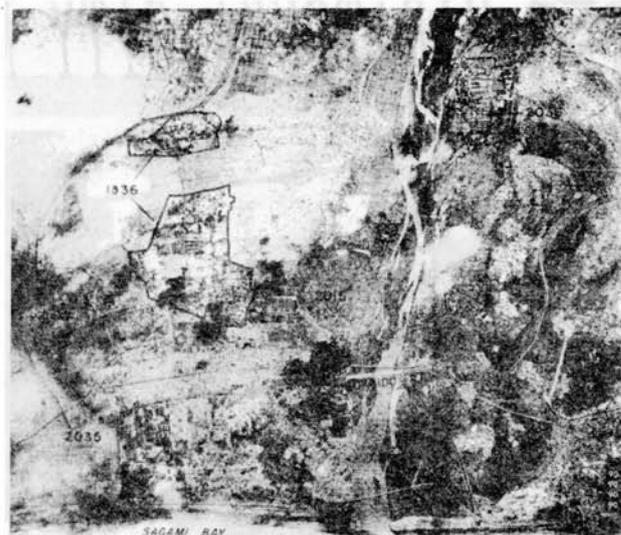
このように米軍は、平塚空襲にあたり数カ月に及ぶ調査検討の結果として、その具体的な空襲の計画を昭和20年5月3日に決定しています。その二ヶ月後の7月16日、平塚はB29爆撃機132機による大規模な攻撃を受けるのです。

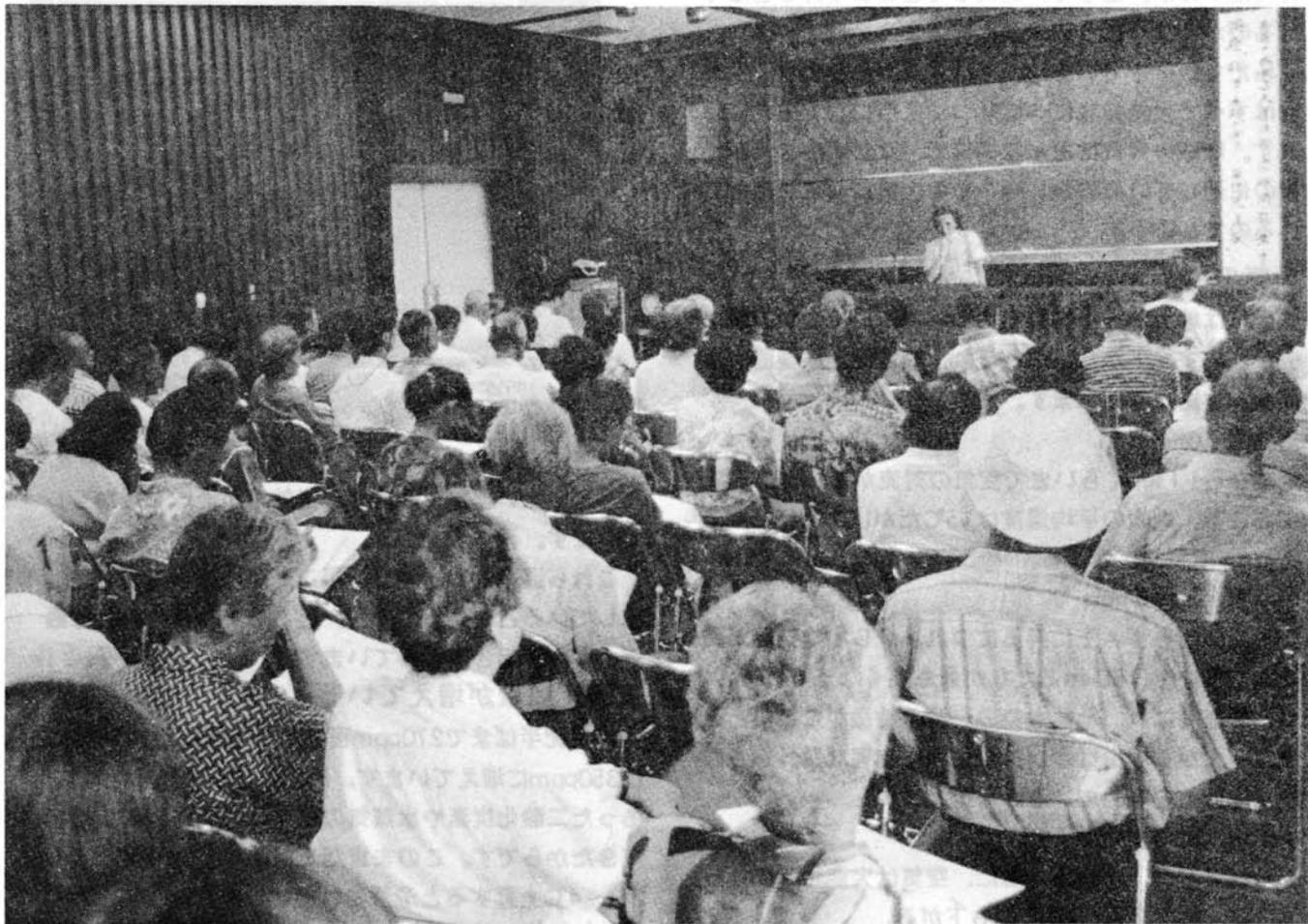
## 【写真】

上：ターゲット・ナンバーを付した偵察写真

中：火薬廠建物全てに番号を付した偵察写真

下：MP1（爆撃中心点）の記入された偵察写真





## 夏期特別展記念講演会開催

■夏期特別展「44万7,716本の軌跡」－平塚の空襲と戦災－の関連事業として、8月13日（日）、記念講演会が実施されました。当日は、講師にお茶の水女子大学講師栗田尚弥氏をお招きし、「戦争末期の湘南と平塚大空襲」をテーマに、平塚大空襲を戦争末期の湘南地域の実状を通してお話いただきました。参加者は市内の方はもちろん、大磯、茅ヶ崎、厚木、藤沢などの近隣市町の方や遠く三浦市などからの参加者もあり、総勢84名を数えました。